

精魂を込めた名工の仕事ぶりは、日本の伝統を支えてきた「技」の一つです。現代ではデザイナーと名工との共同作業も見られます。国内外で評価の高い、柳宗理(やなぎ・そうり)氏と榎天童木工の作品「バタフライスツール」という椅子などは、その一つといえるでしょう。

物作りに従事する四十代のM氏が、作品が売れないと途方に暮れていた時のことです。東京都の小平市立平櫛田中彫刻美術館で、平櫛田中(ひらくし・でんちゅう)氏の「いまやらねばいつできる、わしがやらねばたれがやる」の書を見つけました。そして自分にできることは何なのだろうと振り返ったのです。

M氏が物作りの世界で生きる決心をし、ある師匠に弟子入りをしたのは二十六歳の時でした。当時七十歳の師匠が「六十、七十は鼻たれ小僧。男ざかりは百から百から、わしもこれからこれから」という平櫛田の言葉があると教えてくれたのです。そしてその師匠は「私などまだまだ鼻たれ小僧だ。ここからだ」と力強く語ったのです。

平櫛氏は明治五年に現在の岡山県井原市に生まれ、青年期に大阪の人形師・中谷省古の元で彫刻修業をした後、上京して高村光雲の門下生となりました。精神性の強い彫刻作品を制作したことで知られます。彫刻家の平櫛氏が、本格的に「書」に打ち込むようになったのは、八十歳を過ぎた頃といわれています。老齢により耳が不自

覚悟した時に始まる 自己成就への道



絵・わたなべじゅんじ

由になってからは、電話が使えないので毎日のように手紙を書いて連絡をとっていました。

百七歳でその生を全うしますが、百歳の誕生日の時に向こう三十年分の彫刻の材料を買い込み、そこで「六十、七十は…」の言葉が生まれたのです。

美術館のフロアにたたくM氏の脳裏に、往時の師とのやりとりが甦りました。そして今の自分の身を省みたのです。

この資材は何年後かにはもう使わなくなるものだから、という頭でいたとしたらどうか。平櫛氏のように三十年分の材料を購入することはできないだろうが、果たして自分はどれだけの覚悟を持って仕事に精魂を傾けているだろうか

そして 時勢や経済に責任転嫁をし、自分ができる物作りに全身全霊で打ち込んでいただろうか。いや違うと強く思ったのです。

決心とは、平櫛氏のように準備を万端にすることで退路を断ち、現実の事柄と誠実に向き合っていくことです。目の前の現象に右往左往し、「もしかしたら」「たぶん」「〜と思う」などの言葉に甘えを求めて、塞いだはずの退路を突貫工事しているようでは、決心したとは言えません。

「決心は九分の成就」です。断固とした決心を元に、諦めず、めげず、「これでもか、これでもか」と繰り返し繰り返し行なうことで、強固な信念は培われるのです。